

聖霊シリーズ「霊を見分ける賜物」

1A 霊の世界

1B 霊の勢力

2B 悪魔による変装

2A 聖書の事例 使徒 8 章

3A 偽預言者の存在

1B 数々の命令

1B イスラエルの中

2B 教会の中

2B 偽預言者に騙された預言者 1列王 13 章

1B 自分の利益

2B へつらい

本文

私たちの聖霊シリーズの学びは、御霊の賜物を一つ一つ学んでいるところに入っています。今晚は、霊を見分ける賜物です。「1コリント 12:10 **ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。**」私たちは前回、預言の賜物を見ていきました。神から語られる言葉を受けて、それを人に語り出す時、それは預言となります。そしてそこで、預言を吟味しなければいけない話をしました。すでに書かれている預言である聖書に沿った預言になっているかどうかを、吟味しなければいけない命令が神から私たちには与えられています。

そこで、次に「霊を見分ける賜物」があります。主の御霊から来たものなのか、それともその人の勝手な思いで出てきたのか、それとも悪魔から出てきたものなのか、その霊を見分ける賜物があります。

1A 霊の世界

1B 霊の勢力

私たちは、霊を見分ける賜物を知る前に、霊の世界があることを知らなければいけません。私たちは、この肉眼で見える世界だけが唯一の世界であると考えがちです。けれども、聖書は、目に見える物質の世界があるのと同じように、目に見えない霊の世界が現存していることを教えています。霊は、肉と全く同じところに、同時間に存在することが可能です。

預言者エリシャの活動を思い出してください。その頃、イスラエルに頻繁にシリヤが挑みかかっていました。ところがシリヤが、突然襲いかかるべく、ある所に陣を敷いても、そこにイスラエル兵

が既におり、追い払いました。あまりにも頻繁に、全てのところで見つけられたので、シリアの王は内部通報者がいるのだらうと側近を集めて問い詰めました。しかし、実はエリシャがイスラエルの王に、自分に神から与えられていた知識の言葉を伝えていたので、そうだったのです。家来は、「王さまの奥様との、寝室での会話でさえエリシャは聞いています。」と答えました。

そこでシリア王は、馬と戦車と大軍をそこに送りました。夜のうちに来て、エリシャの家のある町を包囲しました。エリシャに仕える者が朝起きると、これらに包囲されているのを見て、「ああ、ご主人さま、どうしたらよいのでしょうか。」と慌てふためきました。しかしエリシャは、平然としています。「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と言いました。そして主に、この若者の目を開いてくださるように祈りました。すると、「なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて、山に満ちていた。」とあります。(2列王 6:8-23)シリアはエリシャを包囲していましたが、天の軍勢がシリア軍を包囲していたのです。

これだけ鮮やかに、霊の世界は存在します。私たちには、聖なる神の御霊がおられます。そして神に仕える御使いがいます。それだけでなく、神に反対する悪の勢力もいます。パウロはこれを、「支配、権威、権力、主権」と呼びました(エペソ 1:21)。これらがどれだけの支配と権威、権力と主権を持っているかと言いますと、一つの大国の君となる程でありました。ダニエルは、数々の御使いを見ました。ユダヤ人とエルサレムの都について、ガブリエルが来てその啓示を与えました。そして終わりの日に、大いなる戦があります。このことを知らせる御使いが行こうとしたのですが、「ペルシヤ国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれた(10:13)」とあります。ペルシヤは、当時最も大きな国、帝国でした。それを一人の天使が治めていたのです。しかも、それは悪の勢力のほうであります。そして、ペルシヤの君の後に、「ギリシヤの君がやって来る。(20節)」とも伝えました。ペルシヤを倒し、世界帝国となったのがギリシヤです。ミカエルはイスラエルの君として神に仕える天使長であったのに対して、ペルシヤやギリシヤの君は、神の反抗する悪の勢力です。

ですから、私たちは霊の世界が、このように力あるものであり、現実に存在するものであることを弁える必要があります。実に、霊の世界が肉の世界を支配し、操作しているのです。御使いについては、「ヘブル 1:14 御使いはみな、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたのではありませんか。」とあります。そして悪の勢力については、パウロがエペソにある教会に対してこう言いました。「エペソ 6:11-12 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

2B 悪魔による変装

ですから私たちには、戦いがあります。霊の戦いであり、私たちが神の御霊に従おうとすると、これらの勢力が問題を引き起こして、何とかしてそれを阻もうとするのです。そして大事なものは、悪

魔は騙す者だということです。サタンが人に対して初めて行ったのは、ご存知のとおり惑わしです。エバを惑わしました。そして、コリント人への手紙第二 11 章 14 節には、「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」とあります。光の御使いに変装するのです。したがって、ここに「見分ける」という働きが必要なのです。悪魔や悪霊がそのまま、悪を露呈する形で私たちに現われれば、私たちは容易に抵抗することができます。しかし、そうではないので私たちに霊を見分ける能力が必要であり、それを御霊が備えてくださるのです。

使徒ヨハネは言いました。「1ヨハネ 4:1 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」霊だからと言って信じてはいけない、神からのものかどうかを試しなさいという命令です。エペソにある教会では、神のこの命令を守っている姿を見ることができます。「黙示 2:2 わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。」教会の中に使徒と称している者たちがいたけれども、その偽りを彼らは見抜きました。

私たちは、知恵の言葉について学んだ時に、それが自然に神から与えられている側面があることを学びました。けれども、サタンからの影響も私たちが知らず知らずの内に受けていることがあります。ペテロのことを思い出します。彼は、イエス様が「生ける神の御子キリストです。」と告白しました。イエス様は、「このことをあなたに明らかに示したのは肉と血ではなく、天にいますわたしの父です。」と言われました。天からの啓示だったのです。そしてイエス様は、ご自分が十字架に付けられ、三日目によみがえることを告げられました。するとペテロが、イエス様を引き寄せて、なんと主ご自身を諫め始めたのです。「主よ。とんでもないことです。そんなことが。あなたにあるはずはありません。」しかし、イエス様は振り向かれて言われました。「マタイ 16:23 下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」ペテロが人のことを思っていたので、その時にサタンが彼にそうした思いを与えていたのです。ついさっき、天からの啓示が与えられていたのに、サタンに影響された言葉を今は語っています。

ですから、霊の見分けは人の識別力では見分けられない類いのもので、ある人の言っていることは尤もなただけけれども、どうもしっくりいかない。大丈夫そうに見えるのだけれども、大丈夫ではないじゃないか、何か深刻な問題を抱えているのではないかという思いが与えられます。確固たる目に見える証拠がある訳ではない。けれども、後になって確かに、それらが見せかけであったということがあります。イエス様がイスカリオテのユダがご自分を裏切ることを語られても、他の弟子たちは他の話題を話しているのであろうと勘違いするほど、ユダの本性を弟子たちは見極めることはできませんでした。このような分野において、霊の見分けを行います。

皆さんに、そのような見分けをしたことがあるでしょうか？教会生活において、また教会間において主からそうした思いが、何度となく与えられてきました。例えば、20年近く前から、「これは、おかしいんじゃないか。」と思っていたことがあって、少しずつ信頼できる人々に話してはいたものの、かえって分裂や問題を引き起こす者として、一部に毛嫌いされていたことがありました。しかし去年、それがあまりにも明らかな形に、その人が偽りの教えを奉じていることが知られるようになりました。また、ある人が大きな罪、すべての罪が神の前には思いですが、一般の人でも罪だと見なしていること、こうしたことが分からないうちにある人に行われていることがあります。ただ、どうしてもおかしい、違うのではないかと感じて、必ずしも何か悪いことをしているわけではないことがあります。しかし、これはかなり変だと感じるのです。それが実際に、深刻な罪を犯したということが露呈するのです。

この賜物の難しいのは、そのような思いを与えられてそのことを話すと、人を裁いている、分裂を引き起こす、そんな悪いこと言っただけじゃない、そのように責められることです。けれども、与えられている人にはあまりにも明らかなので、どうして他の人たちが分からないのかとってしまうことです。

2A 聖書の事例

人が悔い改めて、神に立ち返るために、この賜物が用いられることがあります。使徒の働き 8 章において、サマリアでピリポが伝道をして、多くの奇蹟と不思議な業も行いました。その見ている人々の中に、シモンという魔術を行なう者がいました。魔術と言っても、超自然的なものではなく、おそらく見せかけで手品のようにして行っていたのではないかと思います。けれども、彼は魔術をする者として、人々に「この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ。」と言われていました。

ところが、ピリポが福音を語り、それらの奇蹟を行なうのを人々が見て、イエス様の名を信じて行きました。そこでシモン自身も信じて、水のバプテスマを受けました。サマリアで神の言葉を受け入れた人が大勢いることをエルサレムにある教会が聞いて、教会がペテロとヨハネを遣わしました。そして、二人は人々が聖霊を受けるように祈ったのです。聖霊のバプテスマですね、主を信じて御霊は内に住んでおられますが、上からの力、聖霊の満たしをまだ受けていなかったのです。それで二人が祈って、人々は聖霊のバプテスマを受けました。何らかの印が、伴ったのでしょう。

シモンがそれを見て、二人のところに金を持ってきて、「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。」と言いました。手品では、一つのマジックの種明かしを教えてもらうために、お金による取り引きが行われるそうです。同じノリで話したのです。けれどもペテロは、はっきりとシモンに言いました。「使徒 8:21-23 **あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれませんが、あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」**

シモンは、ピリポや使徒たちの行なっていることに苦みを持っていたのです。自分に引き寄せられていた人々の注目が、彼らのところに移ったのでそれにやっかみを持っていました。一見、無邪気にお金で聖霊のバプテスマを授けられるかということを知っていたのですが、実は、苦みを抱いていて、それをそのまま放置していたのです。この後にシモンは悔い改めています。

3A 偽預言者の存在

1B 数々の命令

聖書全体で、主は私たちに見分けることを命じておられます。そして神の民の中で、人々を惑わす偽預言者が起こることを教えています。

1B イスラエルの中

イスラエルの民の間では、預言者が夢を見て、不思議や徴を行い、それで「さあ、あなたがたの知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」という者が出てくると警告されています(申命 13:1-5)。主ご自身も印と不思議を預言者を通して行われますから、それで彼らはその人を神からの預言者だと思って、騙されてしまいます。けれども、主に従って歩み、その命令を守りなさい、あなたがたの信仰が試されているのだということを語られました。

2B 教会の中

イエス様ご自身が、偽預言者たちに気をつけなさいと、山上の説教の中で最後に警告されました。「狭い門からはいりなさい。」と命じられて、滅びに至る門は広いと言われました。そのすぐ後で、「マタイ 7:15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言われたのです。さらに、実によって彼らを見分けることができることを話されました。イエス様を信じる、福音を信じることは、自分を捨てることです。自分がどうしようもないことを認めて、十字架の前に出ていき、この方によって罪を赦していただくことです。けれども、人々はその道を通りたくありません。通らないで、それでも霊的知識に至ったということを誇りたいと願います。それで知識としては正しいことを教えます。けれども、先ほどのシモンのように、心にある汚れは放置されたままなのです。だから実が結ばれません。でも、そのほうが自分自身を取り組まなくてよいので楽なのです。

使徒たちが教会に手紙を書いているのは、これら偽預言者や偽教師が教会に入って来ている、あるいは教えの風がその教会に入って来ているから、手紙を書いている場合がほとんどです。はっきりと、偽教師の存在を警告しているのは、ペテロの手紙第二と、ユダの手紙です。ペテロ第二 2 章 1-3 節だけ読みます。「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえて、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食べ物にします。

彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままにいることはありません。」あなたがたの中にも偽教師が現われるようになる、とあるとおり、これが霊の戦いの現実です。

2B 偽預言者に騙された預言者 1列王 13 章

霊の見分けをすることができず、大きな損失を被った人の話を読んでみましょう。列王記第一 13 章です。イスラエルがソロモンの死後、北と南に分裂しました。北イスラエルの王ヤロブアムは、ベテルとダンに、金の子牛を設けて、その祭壇にいけにえを捧げるようにさせました。けれども、主がユダの国から王に対して預言をします。この祭壇を汚して、偶像礼拝を取り除くような王が、ユダから現われる、その名はヨシヤということを告げました。実に、これは 340 年後に実現しました。ヤロブアムは、彼を捕えろと命じますが、その伸ばした腕がしなびてしまい、それから祭壇が壊れて、そこから灰がこぼれ落ちました。ヤロブアムは直してほしいと、その預言者に願って、預言者は祈って、癒しました。

それで王は、「どうか、家に来てほしい。食事をして、それから贈り物を用意したい。」と言ったのです。けれども神の人は、こう言いました。「8-10 節 たとい、あなたの家の半分を私に下さっても、あなたといっしょにまいりません。また、この所ではパンを食べず、水も飲みません。主の命令によって、『パンを食べてはならない。水も飲んでではない。また、もと来た道を通って帰ってはならない。』と命じられているからです。こうして、彼はベテルに来たときの道は通らず、ほかの道を通って帰った。」偶像で汚れているこの土地に留まってはならない、ということでしょう。はっきりと、食べたり飲んだりしてはならず、元来た道を通ってもならないという指示を受けていました。

邪悪な王ヤロブアムが言ったことは、すぐに見分けられますから比較的、容易に断ることができまます。しかし、本当の惑わしは次にやってきました。その出来事を見ていた人たちの父が、ベテルでの預言者でありました。年老いた預言者です。その話を聞いて、彼はろばに乗って追いかけて行きました。そして自分の家に招き、食事に誘ったのです。預言者は、王に対することと同じことを言いました。主によって語られているので、それはできないと。ところが、老預言者はこう言ったのです。「18 節 私もあなたと同じく預言者です。御使いが主の命令を受けて、私に『その人をあなたの家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ。』と言って命じました。」

偽預言を行ないました。彼はただ、彼を自分の食事に招きたいと思っていましたが、それを主の御名によって宣言したのです。そして、この神の人はなんと、家に付いていったのです。なぜか？ 同業者であること、主の御名によって語られたこと、そして自分よりも年上ということもあったでしょう、彼は見分けの賜物を用いないで自分の判断で行ってしまいました。

彼らが食事をしている時に、主が老預言者に真の預言を与えられました。「21-22 節 主はこう仰せられる。『あなたは主のことばにそむき、あなたの神、主が命じられた命令を守らず、主があな

たに、パンを食べてはならない、水も飲んでではない、と命じられた場所に引き返して、そこであなただはパンを食べ、水を飲んだので、あなたのなきがらは、あなたの先祖の墓には、はいらない。』老預言者は、自分の利益のために主の名によって嘘を語りましたが、しかし主は、この神の人に告げるために真実な預言を語らせたのです。そして、その通りになってしまいました。彼は帰る時に、獅子に襲われ死にました。けれども、その葬りは丁重に行われました。その老預言者が彼の死を悼み悲しみ、それから息子に彼の横に自分を葬るようと言いつけたのです。そしてヨシヤが王となって、宗教改革を行っていた時に、偶像礼拝で汚されていた祭壇を、墓を引き起こしてその骨をかけることによって、二度といけにえを捧げられないようにしましたが、彼の墓はそのままにしました。

このように、その語っていることのほとんどは正しいことなのに、残りの僅かな偽りの言葉で人々を惑わすことがあります。私たちは健全な教えからの逸脱について、「そんなに気にしなくていいのに。」と、思ってしまう。けれども、この預言者の逸話から私たちは、「たかが逸脱、されど逸脱」であることを学ばないといけません。偽りの教えによって、その被害が波及します。それが深刻な被害であったりします。

1B 自分の利益

使徒パウロは、偽預言や偽の教えを語るその動機が、あらゆるへつらいと貪りの結果であることを教えています。「1テサロニケ 2:3-5 私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るので。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。」自分たちの利益のために、誘導するために偽預言を行います。キリストの福音の前で、自分自身を十字架に持っていくのではなく、何か他のことで人々を引き寄せようとします。貪りが、その偽預言の動機です。

2B へつらい

そして、へつらいの言葉を語ります。これは、神を喜ばせるのではなく、人を喜ばせたいと思う動機から来ます。偽預言はいつでも、人気があります。なぜなら、人々が悔い改めなくてよいからです。その時に耳触りのよい言葉を聞くことができるからです。しかし、真実な教え、健全な教えは、キリストにある救いの喜びがあります。そして、喜びと平安、愛という実を見ることができます。一見、そのように見えるものであっても、偽物は必ず、罪と混乱、ねたみ、怒り、分裂、これらのものが伴います。表向きのものなのか、真実な清い愛を求めているのか、私たちは絶えず吟味しないといけませんね。パウロが、若者の牧者テモテにこのように指示しました。「1テモテ 1:4-5 果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。」